浅草観音うら

中島直人助教

全瑛美(柏M2)
豊辺将嘉(ベルギーM2)
佐藤亮洋(柏M2)

寿
司
止まれ

こもザ

共栄バッグ

全体の構成

概要
- 地理情報
- 活動目的

基礎情報
- まちの形成史
- まちの現況
- まちづくりの方向性

2007度の活動
- 5つの戦略
- 42のアイデア
- ワークショップ
- まちづくりブック

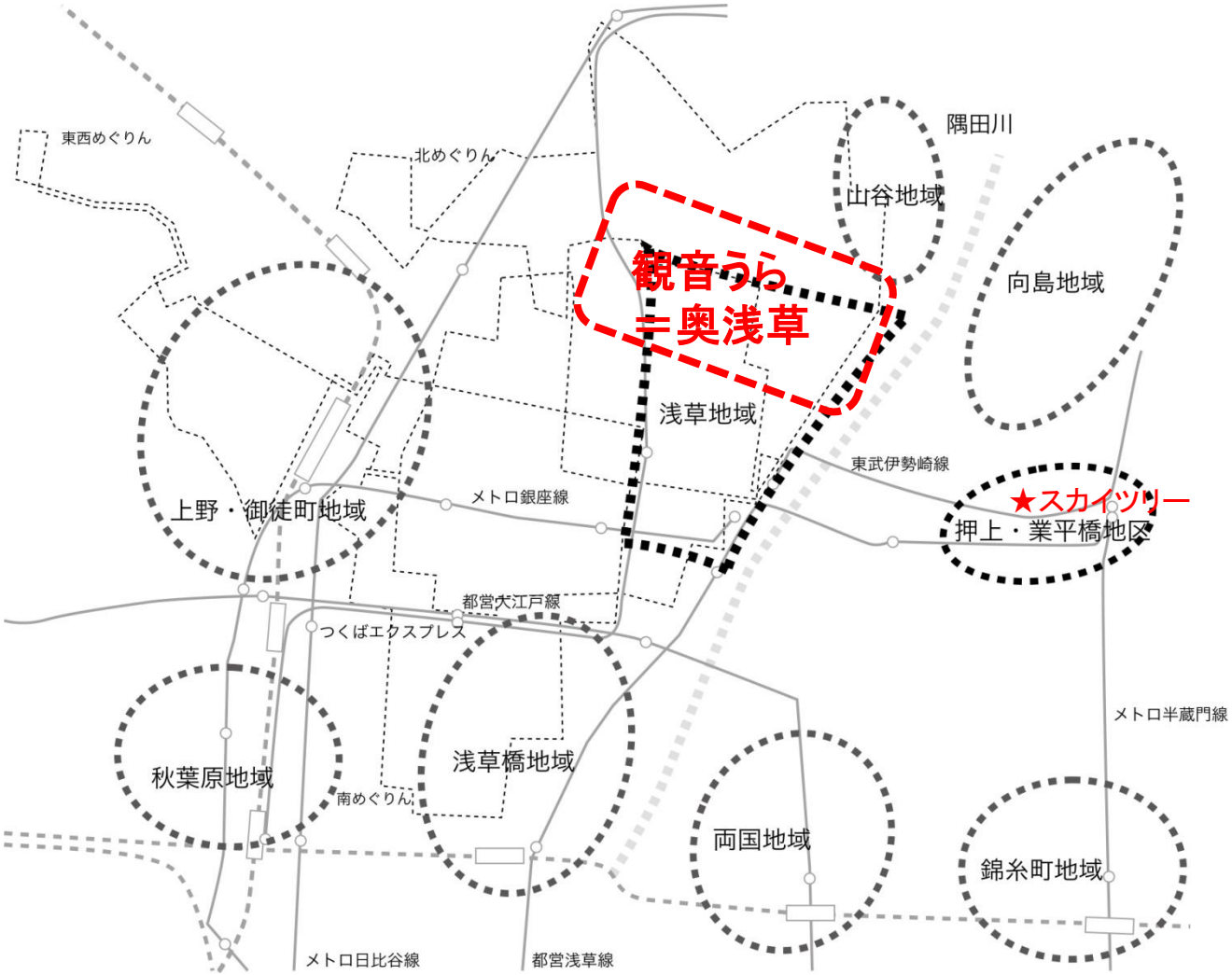
2008度の活動
- 3つのプロジェクト
  観音うらの財産の活用
- まちなみ調査
- ワークショップ
- まちづくり実験
- まち案内所実験

観音うら地理情報

浅草寺の裏
遊郭・芝居の文化
皮革・材木などの産業
まちなかに隠れた資源

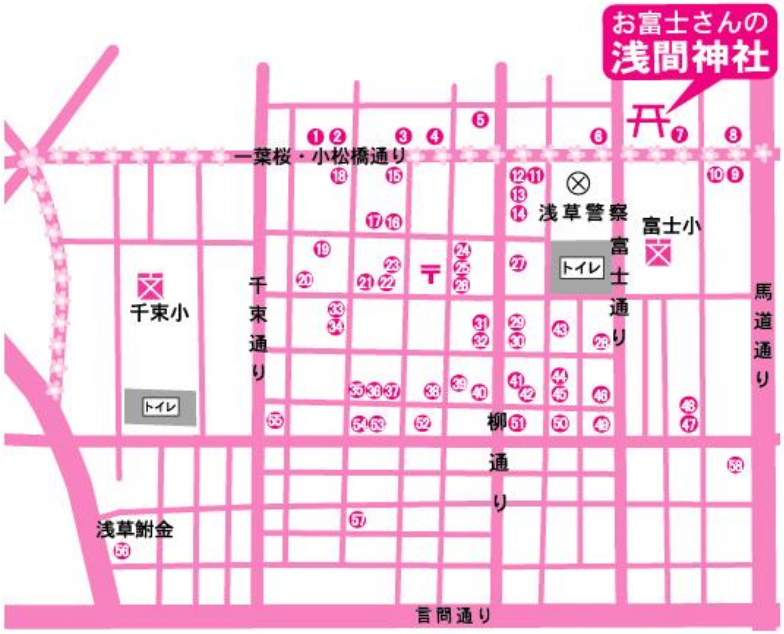
観音うら地理情報

国際観光都市・浅草
外国人宿泊地・山谷
新東京タワーの建設

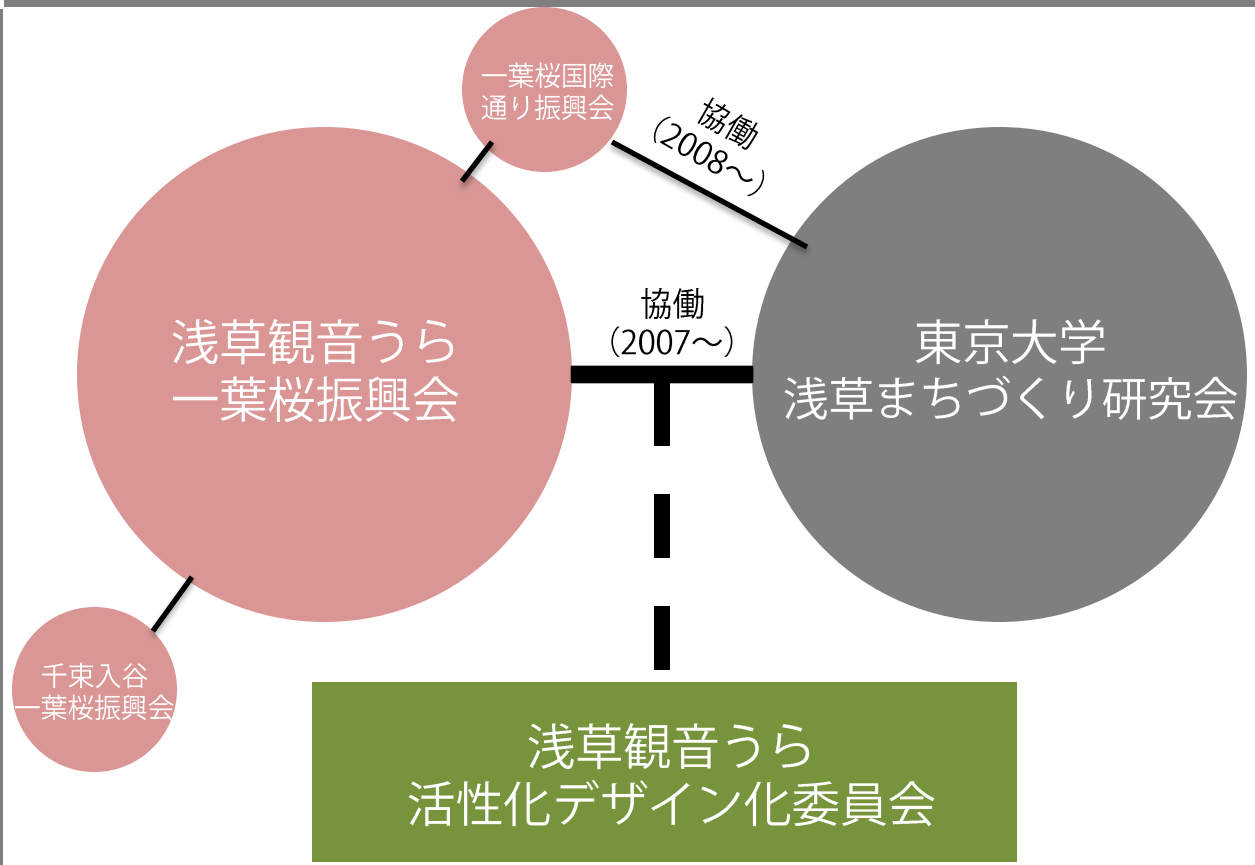


観音うら地理情報

浅草観音うら
一葉桜振興会



観音うら地区の活性化
振興会と大学の連携



＊地元の町会長、商店主たちが主なメンバー。月一開催。まちづくりについて議論し、アイデアを練り、つめる。

「観音うら」の歴史・文化を掘り起こし、
それらを活かして、
まちの「賑わい」を取り戻し、「愛着」を育てる

観音うらの歴史

花街の文化

東京でも一、二の伝統を誇る花柳界。江戸時代に起源を持つ。見番、料亭、割烹は健在。夕方になると、芸者がまちを歩いていく。

遊郭の文化

江戸幕府で唯一公認された遊郭であった吉原。1958年、買収防止法施行により、その役目を終える。近年、おいらん道中が復活。

「見返り柳」安藤広重

芝居の文化

江戸時代末期、猿若町は芝居小屋の町として賑わう。江戸幕府崩壊により、芝居小屋が次々と他の街に移転。1892年には最後に市村座が姿を移転し芝居小屋が姿を消す。しかし、現在も芝居小道具屋が残る。

広重が見た猿若町

観音うらの産業

地場産業として、皮革や材木産業が栄えてきた。

皮革の文化

伝統ある皮革や履物の産業
現在も皮革関連産業の集積日本一

材木の文化

江戸時代からの材木産業の歴史
戦後、材木業組合員数は減少
するも、都内二番目の集積

昨年度の活動

H.19.08	第一回まちあるき
H.19.10	観音うらに向けて42の提案を作成
H.19.11	第一回ワークショップの開催
H.19.12	第二回ワークショップの開催
H.20.02	第三回ワークショップの開催
H.20.03	「観音うらまちづくりブック2008」作成
H.20.04	第一回定例会の開催
H.20.05	植木市まちづくり展示・調査
H.20.06	第二回定例会の開催・産業勉強会
H.20.06	植木市まちづくり展示・調査
H.20.08	第三回定例会の開催
	中心部まちなみ資源調査
	第一回国際通り会合
H.20.09	第四回定例会の開催
H.20.10	第二回国際通り会合（ワークショップ）
H.20.11	第五回定例会の開催
H.20.12	まち案内所実験
	（空き店舗改装・子どもクイズ）
	第六回定例会（ワークショップ）の開催
H.21.01	第七回定例会の開催
	第三回国際通り会合
H.21.03	「観音うらまちづくりブック2009」作成
	「国際通りまちづくりのヒント2009」作成

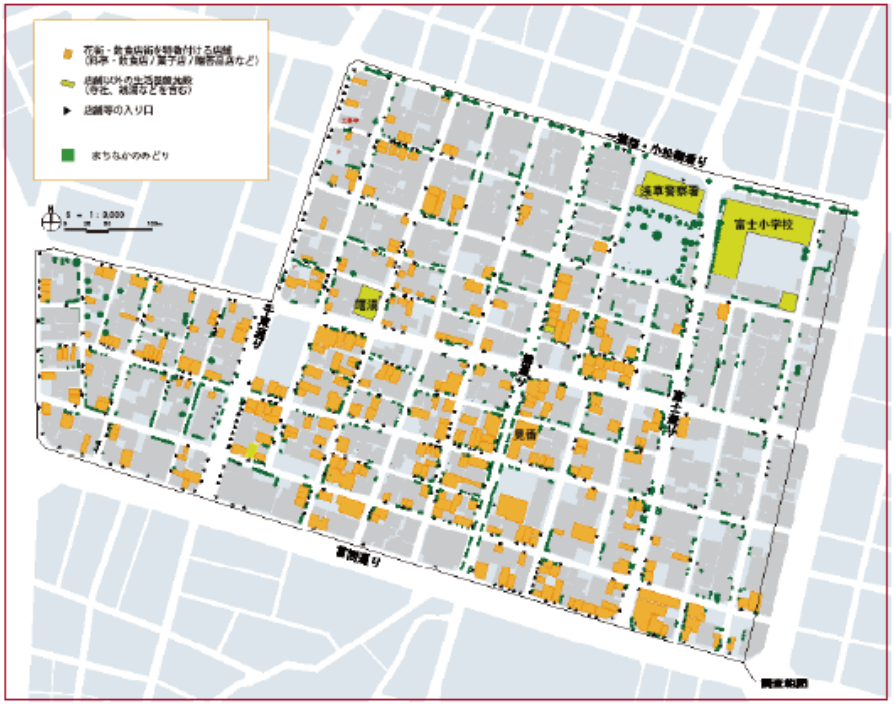
定例会の様子

植木市での展示・アンケート

案内所用棚の制作

1－1　人を惹きつける盛り場の魅力を探る

（2）　界隈の街並みを特徴づける建物と緑



観音うら中心部の店舗や緑の分布

街並みの特徴

観音うらならではの街並みコードを探る

店と緑が生み出す風景

観音うらの中心部の街並みは「花街」の一言では語れない豊かさがある。縦に三本通る千束通り、柳通り、富士通りは、幅員はそう大きく変わらないが、表情にはそれぞれの個性が表れている。この３本が「表」の顔だとすると、これらの通りとまちのシンボルである一葉桜・小松橋通りに囲われたまちなかは、料亭や割烹以外の、数多い細やかな飲食店と意外によく目立つ大小様々な緑が、観音うらの「中身」の風景、つまり独特の盛り場風景を生み出している。

1－1　人を惹きつける盛り場の魅力を探る

（2）現在のまちなみの特徴

観音うら型の建物

盛り場の雰囲気を醸し出すデザイン

「和風」建築

様々なエレメントと店構え

多くの店構えに共通するキーワードは「和風」である。白や茶の塗り壁の建物に、「瓦を乗せた庇」、「格子戸・格子窓」、「のれん」などが加わる。本格的な日本建築は少ないが、ビルの一階などの店舗でもこれらの要素を備えることで、「観音うら」らしい街並みの形成に寄与している。

また、料亭の建物の雰囲気を踏襲し、「塀」を構えた店舗も多い。その多くは、「塀」の内側、玄関との間の僅かな空間、庭に立木を配している。この「玄関樹」とも呼ぶべき樹木は、緑の少ない観音うらにあって貴重な緑資源となっている。「塀」と「玄関樹」の存在によって玄関が街路から隠され、奥まった位置にあるように感じられる。

共通して「和風」を意識しているものの、様々な表情を持つ建物。一番右下が「玄関樹」の例。

艶やかなスナック建築

妖しさを感じさせる閉じた建物

和風建物に混じって、盛り場ならではのスナック建築も数多く存在する。意匠的には、カラフルな色の丸みをおびたオーニングや、「虚窓」とも言うべき壁に施された凹部が特徴的である。基本的に外への窓はない閉鎖的な建物である。「虚窓」が「この閉鎖感を強調している。

3－1　ものつくりのまちの歴史と現状

（3）　皮革産業のまち・観音うらの現状

皮革関連企業の分布（2008 年）

皮革産業の現状
メーカー、問屋を中心に集積

観音うらの皮革産業の現状についてみていく。上図は、2008 年の住宅地図を元に皮革関連の業者をプロットしたものである。現在でも、観音うらにおいては馬道通り以東に多くの皮革関連の企業が集積していることがわかる。

また、皮革関連企業をさらに以下の４つの業種で塗り分けてみる

Ⅰ．タンナー… 海外や国内から皮革を仕入れる
Ⅱ．卸業者…タンナーより皮革を仕入れメーカーに販売する
Ⅲ．メーカー…卸業者より皮革を仕入れ、靴やカバンなどを製作する
Ⅳ．問屋…メーカーが製作した皮革製品を市場に流す
（今回は小売業者は調査対象から除外している。）

４つの業種の分布についてみると、観音うら及びそれに隣接するエリアにおいて、これらの全てが揃っており、観音うらは皮革業界の縮図とも言える状況となっていることが分かる。

3－1　ものつくりのまちの歴史と現状

（5）　当事者の話から皮革産業の現状を知る

観音うらの皮革産業の実情を知るため、実際に皮革の卸業者を営む久保田清人氏（久保柳商店会長）にヒアリングを行い、産業の現状や将来像についての考えをうかがった。

ヒアリング対象者 /
久保田清人氏
協同組合資材建会長
久保柳商店会長

久保柳商店は、昭和 25 年に創業した皮革専門の卸問屋である。牛・豚・山羊・羊などのオリジナルレザーを企画・販売しており、常時 1000 アイテム以上を扱っている。
現在は、皮革１枚単位からの販売、小切れの販売など、一般の来訪客との接点も積極的に持っている。

元気を失いつつある皮革産業
皮革産業の現状と現在抱える課題

・　日本一の皮革産業の集積地も衰退がみられる
現在、観音うらや隣接する今戸なども含めると卸業者が 50 社、メーカーは 300 社程度存在している。他には、名古屋や大阪にそれぞれ 10 ～ 30 社がある程度で、皮革産業の集積は日本一と言える。ただし、歴史的に見ればその数はかなり減少している。

・　後継者の不足
近年は、中国やベトナムなどアジア各国に皮革産業の生産拠点が移りつつある。これらの国々との価格競争は結果として、職人の賃金の下落につながっており、若者がなかなか職業として皮革産業を選びにくくなっている。各企業とも、後継者探しに苦労しており、廃業してしまうような状況も生じている。

・　一般の来客者との接点が少ない
観音うらには皮革関連企業は多いが、それぞれが専門化しており、一般の来客者には受け入れられにくい。例えば、卸業者は、まとまったロットで販売を行いたいため、趣味などで皮革製品を扱いたいような一般の来客者への対応が難しい。

皮革産業を通したまちづくり
皮革産業と一般の来訪客の距離を縮める

・　皮革産業によるまち並みを作る
現在、観音うらではイベントなどを通して来訪客は増えているが、商売をしているお店が少なく産業を感じにくい。そこで、空き店舗などを利用して、皮革関連のお店の出店を誘導できれば、まちに活気を与えると共に産業をアピールすることにもつながると考えている。
・　一般の来訪客との接点を作る
現状は、一般の来訪客との接点が少ない。久保柳商店を始め、何軒かの店舗が革の小切れを販売したり、お土産気分で気軽に買えるような商品の企画などを行っていて有効である。今後はさらに、まち全体で取り組んでいくことが望まれる。

5つの戦略

1　【行きやすい、行きたくなる観音うら】南から北への人の流れをつくる

交通量の多い言問通りが障壁となっており、浅草寺、六区に集まる観光客が
観音うらにまで足を伸ばすことが少ない。観音うらの主要街路である三本の南北の通りは、
それぞれの個性があまり感じられず、魅力に乏しい。

2　【歩きまわって楽しい観音うら】こみちを彩り、まちの風景を磨く

観音うらのまちなかの小道は基本的には互いに直行するグリッド状の街路構成
ということもあり、やや単調である。また、まとまった緑がなく、景観的にも魅力に乏しい。
夜の飲食店街であるにも関わらず、夜間景観に対する配慮もない。

3　【長居したくなる観音うら】観音うらの滞在を魅力づける

かつて地区内に散在していた旅館の多くがなくなり、周辺で発生している観光目的の
外国人向けの宿泊需要に対応できていない。まちなかに休息、休憩できる場所が乏しく、
人々の滞在時間が少なく、単に通過するまちとなっている。

4　【生業が生きている観音うら】皮革文化や材木文化を守り育てる

浅草を代表する産業である皮革産業、特に靴製造業がかつての勢いを失っている。
工場や倉庫、事務所が連なる街並みは、潤いに乏しく、回遊を促す魅力を欠いている。
また浅草西部では、材木問屋が減少し、まちの活気が失われつつある。

5　【歴史を大切にする観音うら】歴史を現在、将来のまちに息づかせる

まちなかの多様な歴史資源が場所づくりやまちづくりにうまく活かされていない。
他地区よりも豊かな歴史・文化資源を持っているにも関わらず、
その存在の発信が少なく、地区のイメージに乏しい。

42のアイデア

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

浅草の中心部の賑わいを観音うらに広げていく

南から北への人の流れをつくる

1　言問通り横断幕
2　言問リング
3　ひさご・千束一体ギャラリー
4　アーケードギャラリー
5　5656交差点広場
6　植木市ストリート
7　見番歴史館
8　足元夢灯り
9　一の鳥居の設置
10　富士通り参道修景
11　富士小学校の改造

こみちを彩り、まちの風景を磨く

12　観音うら緑のこみち
13　お神輿みちと七福神みち
14　通りの名付け
15　グリーングリーン四季折々
16　オモテの山谷堀公園
17　アイストップの修景
18　漏れ光の演出
19　観音うら灯り風情
20　金竜広場みち
21　ビオトープネット

観音うらの滞在を魅力づける

22　銭湯再興
23　湯上りお食事券
24　地域リビング
25　一日ホームステイ
26　散りばめホテルまち
27　モダン・リョカン
28　若者チャレンジショップ

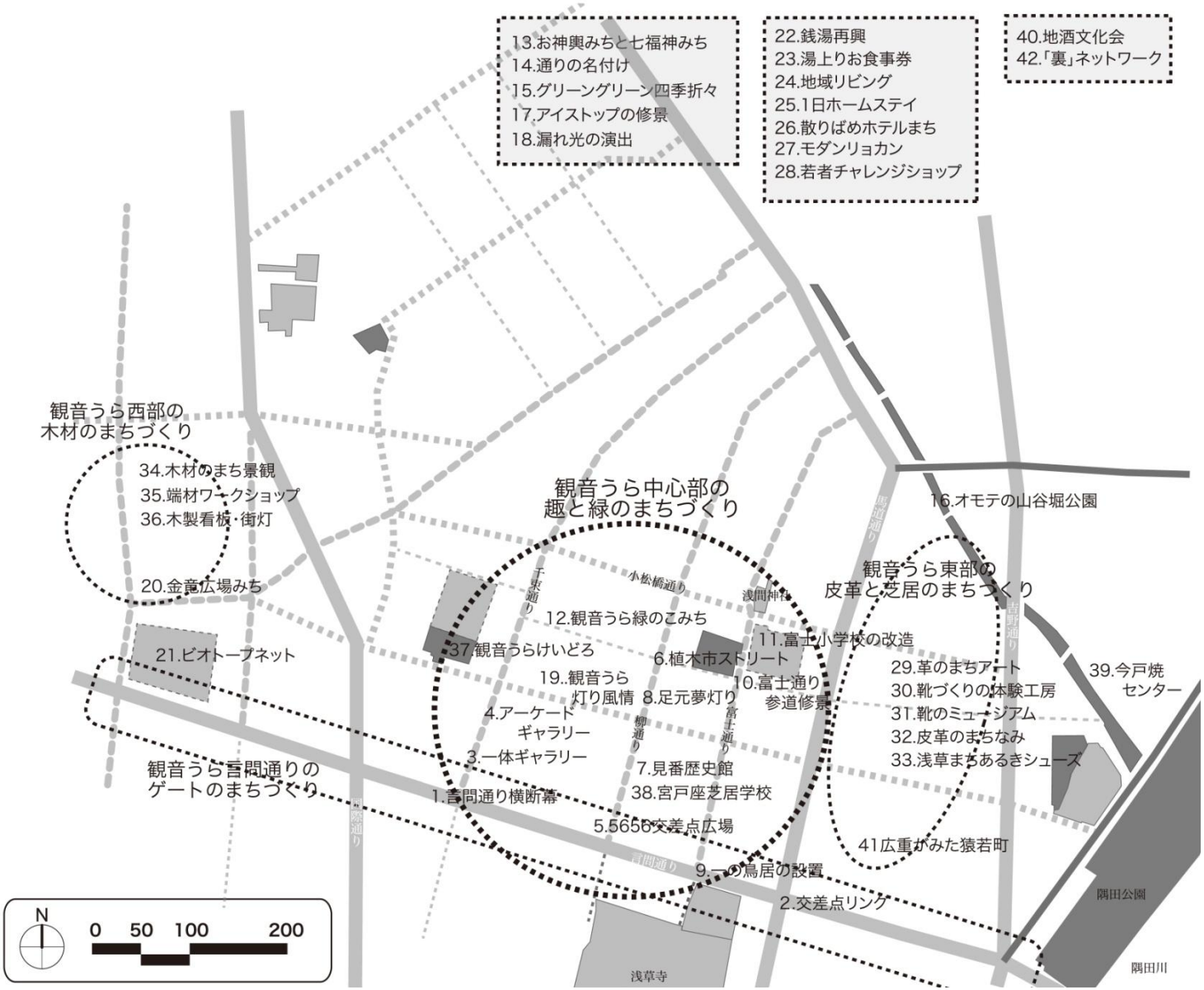
皮革文化や材木文化を守り育てる

29　革のまちアート
30　靴づくりの体験工房
31　靴のミュージアム
32　皮革のまちなみ
33　浅草まちあるきシューズ
34　木材のまち景観
35　端材ワークショップ
36　木製看板・街灯の設置

歴史を現在、将来のまちに息づかせる

37　観音うらけいどろ
38　宮戸座芝居学校
39　今戸焼センター
40　地酒研究会
41　広重が見た猿若町
42　裏ネットワーク

観音うら自体の魅力を賑わいに結び付けていく



１　滞在　中心部に人を泊める

観音うらの立地、資源を活かして、今も生きている「花街」を中心とした「日本のもてなし文化」を味わえる宿泊街をつくり、滞在型観光を実現させる

２　回遊　小さなミュージアムを育てる

観音うらにある様々なミュージアムをまちなかに点在させ、寺社等の名所とともにネットワーク化させ、まちあるき観光を実現させる

３　活気　ものつくりを支援する

日本一の皮革産業集積を活かして、若手のクリエイター系の企業を支援し、まちの活性化に役立てるとともに、ものるくちの現場を見せる工夫を行い、産業観光を実現させる

3つのプロジェクト

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

1　滞在　中心部に人を泊める

賑わいのかたち
「まちに泊まる」から考える

観音うら中心部は、浅草寺方面との距離も近く、宿泊需要が見込める地域である。このまちに賑わいの回復に資する大きな可能性を秘めているのが「宿泊」である。ただし、宿泊地としての魅力は単に立地だけでなく、まち全体の環境の魅力で決まる。観音うらという「まちに泊まる」ということを考えたい。その際、「花街」や「飲食店」、「銭湯」といったものが大きな資源として見えてくるし、風情や雰囲気の大切さも再認識されるだろう。

観音うらの将来は、宿泊する人を核として、まちの風情や豊かな歴史・文化に惹かれた様々な来訪者と、そうした人に惹かれるまちを誇りに思う地域の住民の方双方が、楽しく快適に歩ける、気に言った場所でゆっくり休むことのできるまちを目指したい。そして歴史・文化を大切にしながら、しかし同時に若者のクリエイティヴな活動（ものつくり）の場も数多くある、そんな観音うらがあり得る。

具体的なプロジェクト

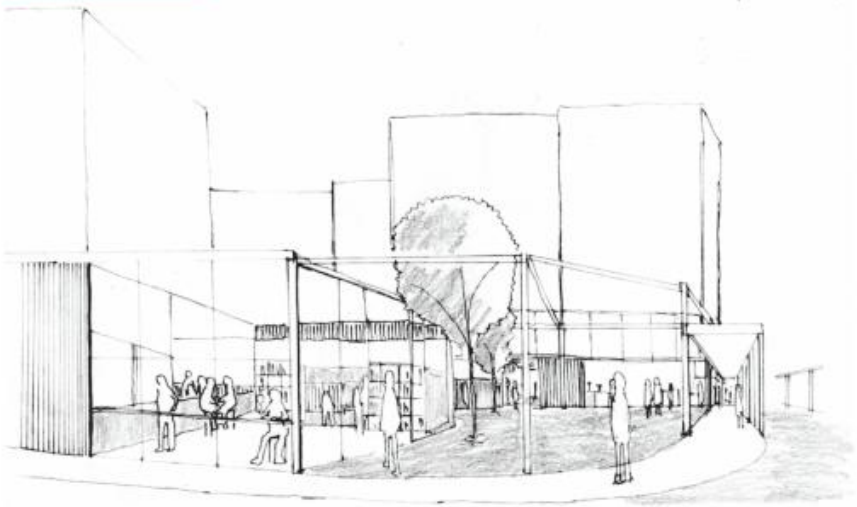
- ●宿泊拠点の整備
- ●飲食店・銭湯との連携
- ●まちなみデザインガイドラインの締結
- ●縁台や植栽、照明などによる演出

3つのプロジェクト

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

1　滞在　中心部に人を泊める

千束通り空地の活用



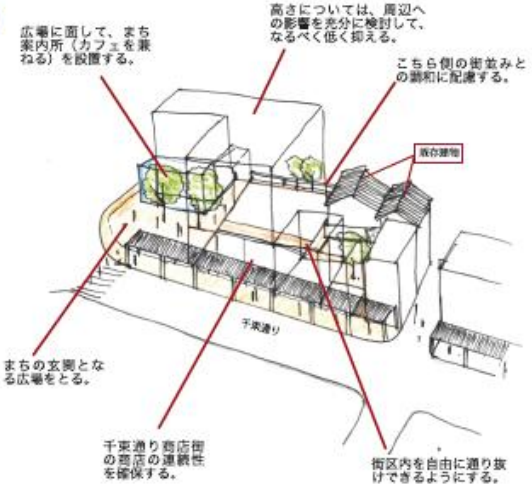
まちの広場となるホテル

まちづくりに資する宿泊・交流施設

観音うらの宿泊拠点であると同時に、まちの案内や交流機能を有するホテルを誘致する。周囲の街並みとの調和や観音うらで進めようとするまちづくりに協力を要請する。

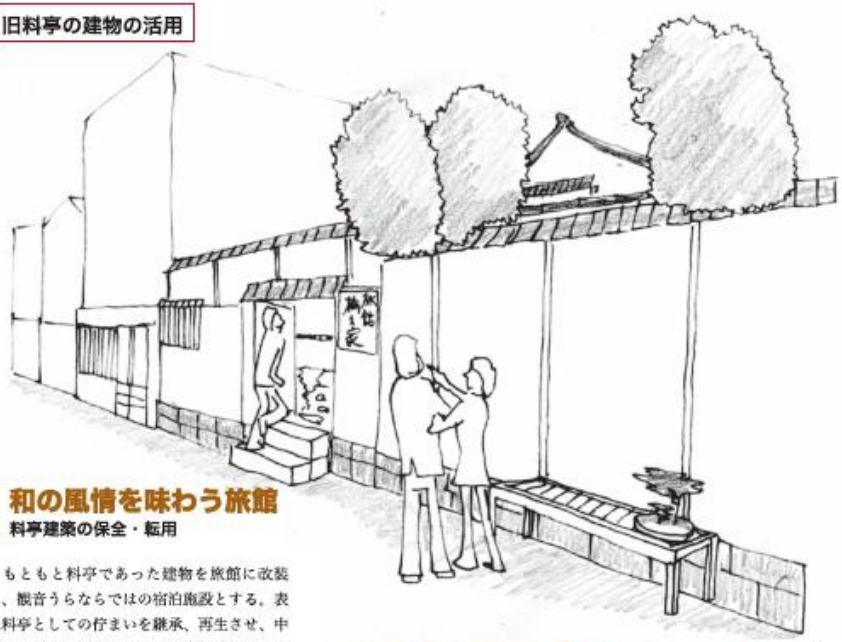
宿泊者だけでなく、一般の観光客や地元の住民も気軽に立ち寄れる場所とする。ここから観音うらの新しい文化を発信する。

千束通り沿いの駐車場として利用されている空地



考慮・検討すべき事項

旧料亭の建物の活用



和の風情を味わう旅館

料亭建築の保全・転用

もともと料亭であった建物を旅館に改装し、観音うらならではの宿泊施設とする。表は料亭としての佇まいを継承、再生させ、中はさまざまな趣向を凝らした高級感のある和の空間とする。外国人観光客をはじめ、日本の伝統文化に関心のある客層をターゲットとした本格的な旅館を目指す。

特に観音うら中心部に立地する旧梅乃家は、立地的にも浅草中心部からもアクセスしやすい場所にある。この建物の積極的な活用を検討していきたい。

梅乃家の建物の現況

室内のイメージ

3つのプロジェクト

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

2　回遊　小さなミュージアムを育てる

小さなミュージアムの創設
まちを深く理解するための仕組み

豊かな歴史・文化資源をまちづくりに活かすために、小さなミュージアムというかたちで各資源を顕在化させる。そして、これらのミュージアムを組み合わせることで、このまちををより深く理解するための重要な仕組みとなり、回遊を促す契機を提供することになる

小さなミュージアムは、そのすべてが「本格的な美術館のように特別なものを展示して見せる」ことを主目的としているわけではない。個々人の趣味を展示する場所であったり、来訪者にとってはまちなかの貴重な憩場所、休憩場所であり、交流の場であり、地域への入口となる場である。

また、個々のミュージアム自体は多くの人を引き付けるほどの魅力を持たない場合も多いが、他のミュージアムと組み合わせることで、魅力は高まる。そのためには、ミュージアムの場所を示した地図やウェブサイト等の作成、あるいは情報が一元的に集まるまち案内所の設置といった取組を同時に進めていく必要がある。

ミュージアムの多様なかたち
ミュージアム化が期待される事例

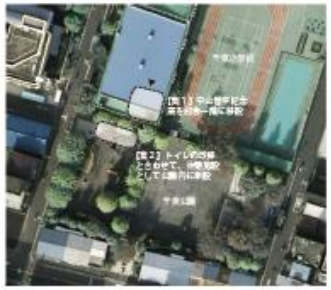
小さなミュージアムは様々なかたちをとりうる。運営主体や設置場所だけをとってみても、多様な組み合わせがあり、そこに展示内容の特性も加わる。本章では、以下の６つのミュージアム・イメージを例示する。

1　「花街文化館」
　想定される運営主体：浅草三業組合
　想定される設置場所：浅草三業組合会館
2　「皮革産業ミュージアム」
　想定される運営主体：皮革関連組合
　想定される設置場所：皮革会館もしくは空き店舗
3　「中山晋平ルーム」
　想定される運営主体：千束小学校、町会、台東区
　想定される設置場所：千束小学校ないし千束公園
4　「吉原学習構想」
　想定される運営主体：町会
　想定される設置場所：吉原地域
5　「光月銘木コーナー」
　想定される運営主体：各材木店
　想定される設置場所：各材木店店先
6　「鮒小経」
　想定される運営主体：鮒金
　想定される設置場所：鮒金店舗、路地

1　「花街文化館」

2　「皮革産業ミュージアム」

3　「中山晋平ルーム」



4　「吉原学習構想」

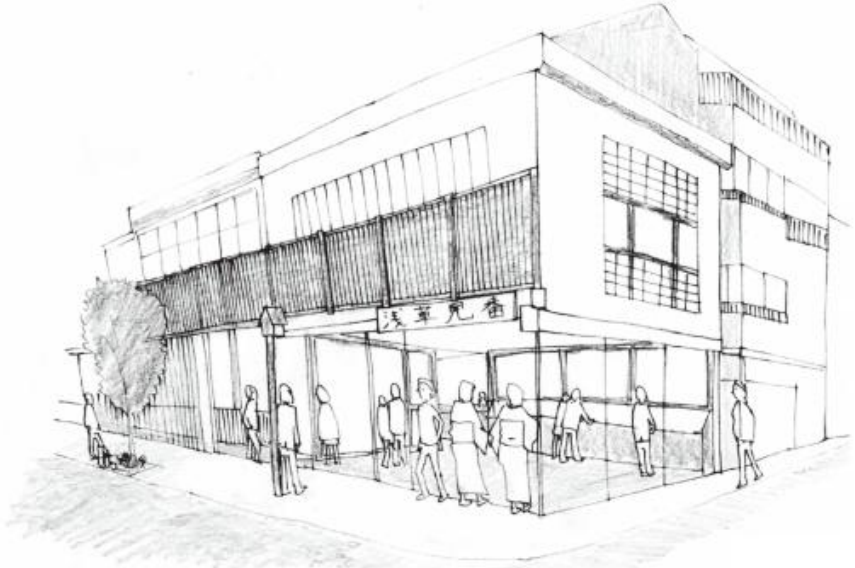
5　「光月銘木コーナー」

6　「鮒小経」

3つのプロジェクト

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

2　回遊　小さなミュージアムを育てる



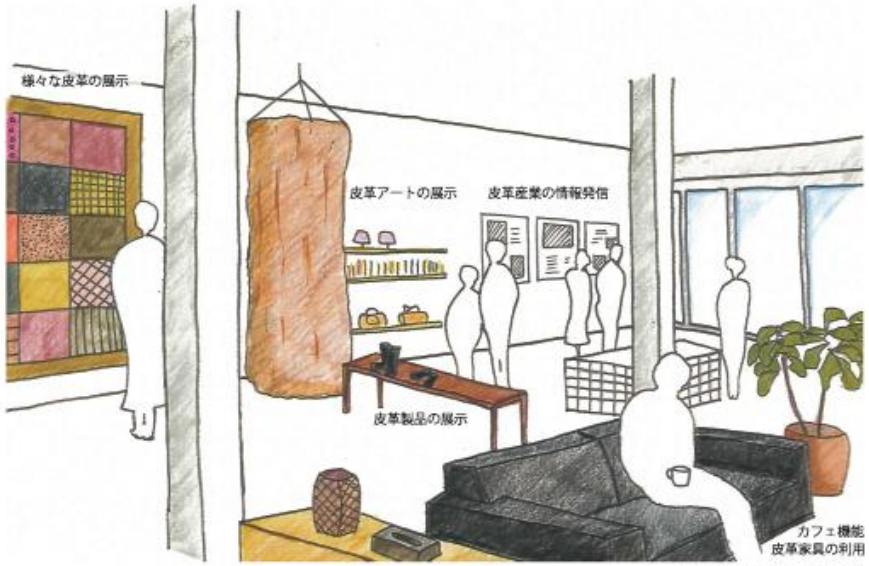
「花街文化館」のイメージ

花街の文化を伝える
浅草三業会館の改修

浅草三業会館を改修し、花街の歴史や文化を分かりやすく解説するミュージアムを設置する。観音うらを訪れた観光客に、つねづね「敷居が高い」と敬遠されがちな花街を「身近なもの」と感じてもらうための「入り口」としての機能を持つ。地元にとっても自分たちの地域の歴史、文化を学ぶ施設となる。見番の入り口も兼ねており、実際の芸者さんもこのミュージアムを通ってまちへと出ていく。なるべく通りからも中が見えるようなつくりとする。料亭や割烹の紹介、芸者の紹介も兼ねる。

また、ミュージアムの開設に合わせて、浅草三業会館での芸の稽古を公開する回数を増やすなどの「花街観光」の促進させるための様々な取り組みを行う。

浅草三業会館の現況



皮革産業ミュージアムイメージ

皮革産業ミュージアム
皮革産業を知る / 触れる場に

観音うら東部には、皮革を扱う企業が集積している。ただし、これらの企業は皮革産業の分業の中で専門化され、一般の来訪客との接点が少なくなっている。

結果として、現状では、皮革産業は一般の地域住民や来訪客にとって感じにくく、まちに息づく産業としてまちづくりに活かされていない。

そこで、皮革産業と一般の地域住民や来訪客の接点となり得るような場として、皮革産業ミュージアムを構想する。

3-2(3) で述べるような皮革関連企業の代表らで構成されるワーキンググループを組織し、ミュージアムの企画・運営を行っていくこと。また、設置場所としては、観音うら東部において、皮革関連の組合の事務所や会館の一角や、空き店舗や空き工房などを利用することが考えられる。

ミュージアムの内容は、観音うらの皮革産業の成り立ちや現状を伝えるものの他、実際にこの地域で生産された製品を見たり、触れたりできるようになっているのが望ましい。

例えば、観音うらの製靴職人が作った靴や手袋などを試着できれば、その高い技術を感じてもらうことにもつながる。

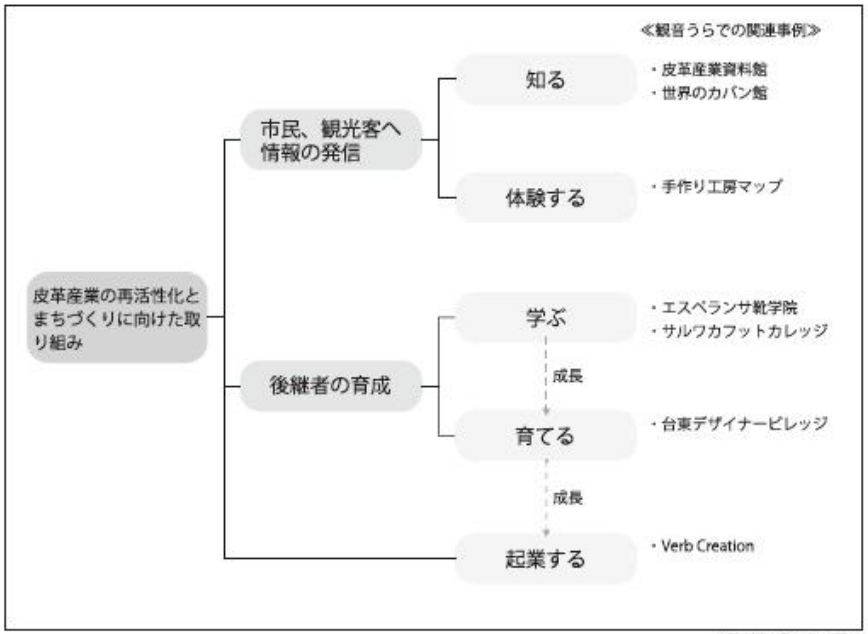
観音うら東部には、飲食店が少ないこともあり、ちょっとお茶を飲むスペース（カフェ）なども併設し、革が用いられたソファーに腰かけてゆっくりと休憩してもらえるようにする。カフェの収入で、ミュージアムの運営費用を賄うだけでなく、より皮革産業に親しみを持ってもらえる仕掛けとしても有効である。

皮革産業ミュージアムを通して、観音うらに古くから息づいてきた産業がまちづくりに活かされることが期待される。

3つのプロジェクト

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

3　活気　ものつくりを支援する



皮革産業を取り巻く現状

観音うらの皮革産業の再活性化を目的とした活動の構造を示したのが上図である。これらはいずれも産業再生をまちづくりへ展開していく際の第一歩となり得るものである。活動内容から「知る」、「体験する」、「育てる」、「学ぶ」、「起業する」の5つに分類し、それぞれについて現状を述べることとする。

皮革産業を「知る」

皮革産業資料館、世界のカバン館…

皮革産業をまちづくりの資源として活かしていくには、まず住民や来訪客に産業の実態や意義を知ってもらう必要がある。この「知る」という観点では、皮革製品やそれに関連した品を展示する「皮革産業資料館」や「世界のカバン館」などが既に設置されている。

このうち皮革産業資料館は、1978年に開設された業界初の資料館で、常設展示室と関連の書籍を集めた書庫からなる。展示品は、江戸時代の武士が使用したようなものから近年のスポーツ選手の道具まで幅広く、観音うらの皮革産業がいかに我々の生活と切り離せないものなのかを教えてくれる。(⇒2-2(3)に関連)

皮革産業資料館

皮革産業を「体験する」

手作り工房マップ…

また、より深く皮革産業を理解し、その様子をイメージするには「体験する」ことが有効である。

台東区では、具体的に手作り工房マップという仕組みを整備している。これは、伝統工芸品や靴、鞄など皮革産業にまつわるものづくりの良さを体験してもらうため、作業風景の見学や体験ができるアトリエ店舗を募り、リスト化したものである。リストを見て予約をすれば、誰でも実際に産業を「体験する」ことができる。現在、全区で75店がアトリエ店舗として活動しており、観音うらの皮革産業に関わる店舗も登録されている。

手作り工房マップ

皮革産業を「学ぶ」

エスペランサ靴学院、サルワカフットカレッジ…

また、実際に皮革産業に関わる意欲を持った人に対して、伝統的に地域に蓄積されてきた技術を「伝承する」ことが次のステップである。

エスペランサ靴学院やサルワカフットカレッジは、いずれも民間の専門学校で、一流の講師陣が若手に技術を伝承している。

このうち、エスペランサ靴学院は製靴技術だけでなく靴型・人間工学・デザインなどあらゆる面から靴について教授する靴専門の学校である。1973年の開校以来、800名以上の卒業生を輩出し、靴メーカー、問屋、商社、アパレルメーカーなど関連の業界に有能な人材を供給することにつながっている。

エスペランサ靴学院

皮革産業を「育てる」

台東デザイナーズビレッジ…

皮革産業の再活性化に資する人材を確保するには、技術を学んだ人を支援する必要、つまり若い人材を「育てる」必要がある。

台東デザイナーズビレッジは、台東区の地場産業である靴や鞄、ベルトなどの皮革産業関連の製品を含むファッション関連デザイナーの創業支援施設として活動を行っている。

施設内には創作活動や打ち合わせなどに必要なスペースが確保される他、インキュベーションマネージャーがおりビジネススキルも学ぶことができる。現在も、18社が所属しており、若手の育成の場として機能している。

台東デザイナーズビレッジ

皮革産業を「起業する」

Verb Creation…

以上のような過程を経て、観音うらでも実際に起業する若い人材が現れている。

例えば、Verb Creationは観音うらでハンドメイドの製靴業を営んでいる。観音うらに新たな企業が進出することは、産業全体の底上げにつながると共に、街並みに活気をもたらす。

Verb Creation

3つのプロジェクト

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

3　活気　ものつくりを支援する

皮革産業を活かした街並みイメージ

皮革産業をまちづくりの資源に

まちに息づく産業の活かし方の提案

観音うらの皮革産業の歴史や現状を見てきたが、ここでは皮革産業をまちづくりの資源として捉え、産業を通したまちの活性化や産業自体の復興の方法について提案を行う。

提案は大きく３つに分かれる。一つ目に皮革産業を感じ取れるような街並みの形成、二つ目に産業の後継者の受け入れ方などまちづくりの仕組み論、三つ目に産業をアピールする方法としてアートとの融合やイベントの開催である。

現状においては、なかなか皮革産業の活気を感じ取りにくい街並みも、ここで提案するようなちょっとした意識の変化や仕組みづくりを行うことで魅力的なものとなる可能性を持っている。

現在の街並み

まちに開かれた店舗・工房

皮革産業が感じられるまちへ

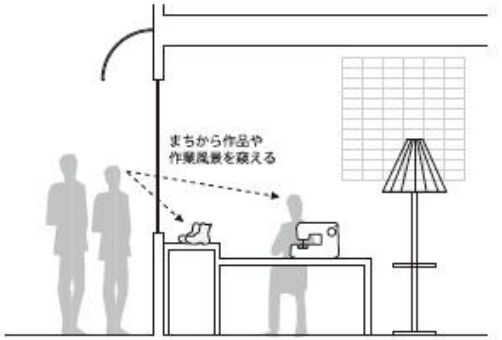
現在、観音うらを歩いていても皮革産業を視覚的に感じる場面は少ない。

その要因は、3-1(3) でも見たように、皮革産業に関する多くの店舗や工房が、１階に位置していても、くもりガラス等の利用で通行人に作業の様子を窺えないようにしていることがあげられる。

しかし、普段見ることの出来ない靴など身の回りの品が生産されていく過程は来訪者にとっては非常に興味をひかれる部分である。

そこで、皮革産業を扱う企業は出来る範囲で、建物内外の視線の行き来を意識した設えとすることを検討したい。

各店舗が積極的に作業をまちに対して開くことで、職人による真剣なものづくりの様子をまちの至る所で目にできるようになり、まちなみ自体にも活気がもたらされることだろう。



まちに開かれた企業イメージ

皮革を感じるエレメントの利用

皮革を素材とした街並みづくり

各企業がまちに対して開くことと同時に、街並みを演出するエレメントからも皮革産業が感じ取れるような工夫を行いたい。

例えば、各企業が店先に取り扱っている皮革製品や、簡単なオブジェクトを皮革産業の技術を用いて並べたりするだけでも、来訪客に対して大きなアピールとなり得る。

その他にも、まち全体としてサインやフラッグが革でできていたり、信号機や消火栓などが革でそっと包まれていたりといったアイデアも考えられる。

このように、まち中に皮革を感じるエレメントを散りばめることで、皮革産業が盛んな観音うらならではの景観が生まれる。

【参考事例】日暮里繊維街での街並みづくり

荒川区日暮里には、60を超える和装、洋装、紳士・婦人服地、絣、プリント、合繊雑物、ボタン、ビーズなどの生地織物に関するお店が集まる「日暮里繊維街」と呼ばれるエリアがある。

これらの店舗は、一般の来訪客をも商売の対象としていることもあり、連日多くの人が繊維目当てに訪れる。

そのまちなみは、左下写真のように各店舗がまちに対して開いている他、右下写真のように繊維街に沿ってフラッグやサインが設置されることによって、まちを散策する中で「繊維のまち・日暮里」を十分に感じられるまちなみとなっている。

繊維街のまちなみ（左），サイン（右）

植木市

2008年5月31日～6月1日(一の富士)、6月28日～29日(二の富士)に行われた植木市では、来訪者に観音うらというまちに興味を持ってもらうべくパネル展示やマップ配布などを行い、また来訪者の属性を把握すべくアンケートを実施した。

観音うら紹介パネル作成
観音うらを知ってもらう

一の富士においては、来訪者に観音うらというまちを知ってもらうべく、観音うらまちづくりブック2008の内容をもとに、「まちを知る」、「まちを歩く」、「まちを創る」の3つのキーワードを用いてパネルを作成した。「まちを知る」では、観音うらは花街としての歴史があり、それが今に受け継がれていることを示した。「まちを歩く」では寺社・史跡・公園など観音うらの見どころ、年中行事を紹介した。「まちを創る」では、前出の内容を受けて、まちをよりよくしていく提案を行った。

観音うらマップの配布
観音うらを歩いてもらう

二の富士においては、来訪者に観音うらのまちを歩いてもらうべく、持ち運びできるマップの作成を行った。江戸時代の地図・観音うらの概要・年中行事を表面で紹介し、現在の観音うらの見どころを加えた地図を裏面に掲載した。

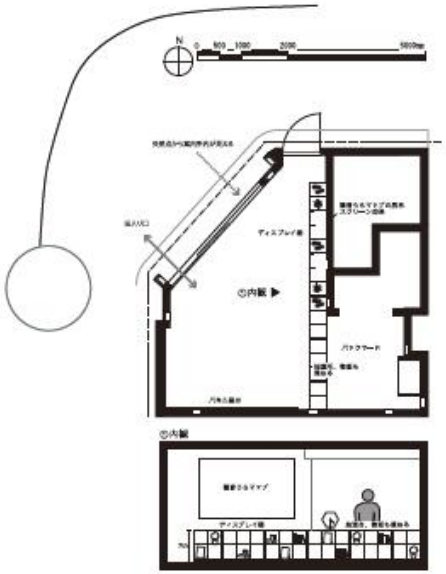
アンケートの実施
来訪者の実態を把握する

来訪者を対象にアンケートを行った。一の富士の際には、主に観光客をターゲットとし、どこから来訪したか、どこを経由して観音うらに来たか（浅草寺・六区など）、食事をどこで食べたか、等について何った。ただ実際は、回答者の多くは地域住民であった。

二の富士では、地域住民と観光客で分けてアンケートを行った。地域住民に対しては、普段の買い物場所や植木市の思い出等について回答を得た。

観音うらマップの配布一見本

一葉桜祭り
See
見る



案内所の設計図

冬の一葉桜まつりの際には、イルミネーションを行っている柳通りや小松橋通りにおいては人通りが多い。しかし観音うらはそれらの大きな通り以外にも多くの店や観光資源がある。よって、通りからまち全体に人を誘導すること、また地域資源の可能性を引き出し、それを来訪者のみならず、地元の人にも感じ取ってもらうことを目的とし、みちの情報を発信するセンターの開設を検討した。そのコンテンツとして、今回の実験では、観音うらの特徴を示したパネルの作成、観音うらに関係する物品の展示、観音うらにまつわるクイズの作成を行った。

空き店舗（旧薬局）を活用

まちを歩いてもらうための拠点づくり

実験を行った場所は、柳通り、一葉桜・小松橋通りの交差点に面する場所で、かつては薬局が営業していたが、10年ほど前に廃業した場所である。目立つ場所にあること、正面がガラス張りとなっていることを活用し、外からも中の展示物の様子がうかがえるように空間をつくった。

会場は2008年12月6日、13日、20日（いずれも土曜）に開設し、抽選所を兼ねた。今回は利用客が多かったことと空間が狭いことから見送ったが、案内所内に椅子などを置いてくつろげる場所を設けることも検討した。

外観

内装

まちを案内する・理解してもらうコンテンツ

観音うらまち案内パネル

観音うらの特徴を23項目に整理し、それらを「楽しむ、食べる、見る、知る、出かける」の5つのテーマでまとめた。一つの項目あたり60cm四方とし、壁一面に示した。また外国人観光客の来訪を想定し、項目のタイトルについて日・英・中・韓の4カ国語で示した。

まち案内パネル

観音うらグッズの展示

観音うらでつくられているもの、観音うらにゆかりのあるものを、35cm四方のディスプレイを作成して展示した。観音うらでは皮革・材木などのものづくり産業が盛んであるため、それを実物を見ることで来訪者に理解を深めてもらう目的であった。

グッズ展示の様子

観音うらクイズ

来訪する地元の小学生を主なターゲットとし、観音うらにまつわるクイズを作成した。前述のパネルを見ると回答できる内容として作成しており、人物・行事・観光名所の名前などを出題した。回答の際には同時に来訪される父母と共同で回答作業を行い、子どもの理解を深めることを想定した。

クイズの解答の様子

まち案内所実験の成果

地域住民のための場所の必要性を認識

今回の実験では、地元の人以外の人通りは殆どなく、当初の目的であったまち案内所の実験は、空間面だけに終わり、機能についての検証はできなかった。但し地元の人が自分のまちを見直すきっかけにはなった。まちへの愛着を高める場づくりの重要性を改めて認識した。

1．まちづくりを巡る基礎情報
- まちの形成史
- まちの現況
- まちづくりの方向性
- まちづくり資源

2．まちづくりの戦略とアイデア
- まちづくりの戦略
- まちづくりアイデア総覧
- 実現に向けての検討

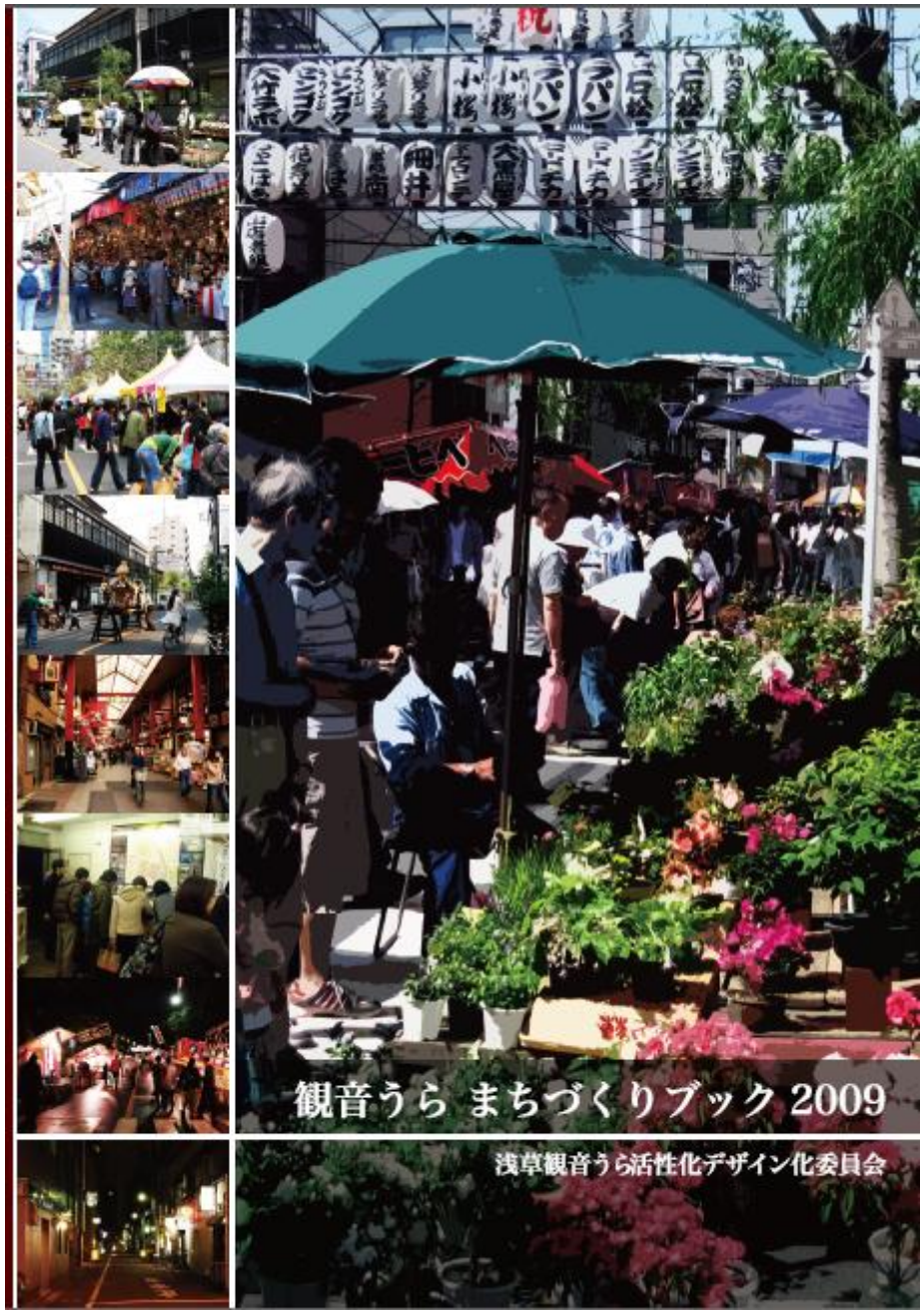
3、活性化デザイン化委員会活動記録
- 活性化デザイン化委員会
- ワークショップのまとめ

1．滞在
中心部に人を泊める

2．回遊
小さなミュージアムを育てる

3．活気
ものつくりを支援する

4．活性化デザイン化
委員会の１年



まちづくりのヒント

概要　基礎情報　これまでの活動　今年度の予定

「一葉桜国際通り界隈」

1．界隈の成り立ちを知る

2．界隈が持つまちづくり資源を探る

3．まちづくりのアイデアを検討する

調査
提案
ワークショップ

一葉桜祭り
（4月11日）

お富士様の植木市
一の富士（5月末）
二の富士（6月末）

調査
提案
ワークショップ

予定（地元から支援を要請されている事項）

○「活性化デザイン化委員会提案」の実現に向けた取り組み支援（→台東区や議会との窓口「奥浅草まちづくり協議会」（2008年設立））

○「国際通り一葉桜界隈」での「中山晋平」研究＆活性化実験（→流行歌・童謡から考えるまちづくり）

○材木のまち「浅草入谷一葉桜界隈」での材木を活かしたまちづくりの調査、提案、実験（→木材を使用したモニュメント、材木のまちなみづくり・・・・）

「しゃぼん玉」、「東京音頭」の中山晋平

材木をつかった家具づくり

材木のまちなみ

騙されたと思ってきて下さい!!

浅草観音うらプロジェクトに
参加したい方、
興味を持ったそこのあなた!!

4月吉日（後日、お知らせします）、
説明会を開催しますのでお越し下さい！